琉球大学学術リポジトリ

教育科学研究会編『教育科學』総目録

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター
	公開日: 2008-11-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 梶村, 光郎, Kajimura, Mitsuro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8274

教育科学研究会編『教育科學』総目録

梶　村　光　郎*

The Table of Contents on "Science of Education" Published by Kyoiku-kagaku-kenkyukai－The Society for The Study of Science of Education

Kajimura　Mitsuro

まえがき

一

戦後の作文教育や総合学習の歴史を追究している過程において，大正から戦後初期まで教育ジャーナリストとして活躍してきた志垣寛が主宰した戦後最初の国語教育の総合的な専門雑誌である『國語創造』（1946年11月創刊）や，戦後の教育の民主化を推進しようとして志垣が発刊した教育関係の週間新聞である『教育新聞』（1945年12月15日創刊）を発掘し，東京の出版社である緑蔭書房から今年の5月と10月にそれぞれ復刻を行なってきた。本目録は，その継続的な戦後の教育文化に関する研究の基礎作業の一つとして，教育雑誌『教育科學』の総目次を示したものである。

戦後初期の教育科学の建設を目的として発行された教育雑誌としては，戦後に再建された教育科学研究会（会長城戸幡太郎）が主宰する『教育』（1947年8月創刊，社会社版）とその後継雑誌である『教育』（1948年4月，世界評論社版）が知られているが，教育関係の出版社である同學社の社内に創設された教育科学研究会の存在とこの会が主宰した『教育科學』誌については，これまでほとんど言及されてこなかった。その理由については色々推測が可能であるが，全冊を揃えて所蔵している研究機関がなく，ほとんど同誌を手にする機会を持つことができなかったという事情が大きく関係していよう。他には，戦後の混乱期のなかで用紙難から発行部数も少なく手にすることができなかったからではないかとか，いわゆる民間教育運動団体の機関誌という性格のものでなかったために関係当事者の記憶からも遠退いていたとかいうようなことも関係しているのかもしれない。しかし，現在そのことに解答するだけの資料は持ち合わせていない。それは今後の検討課題の一つである。また，この『教育科學』誌の教育史上の役割や意義についての評価の検討も戦後の教育民主化や民主教育の建設の問題とも関係する重要な課題であるが，そのことは別に機会を得て行なうこととし，ここではこの雑誌の特徴などを簡単に紹介することにとどめ，総目次の紹介をしていくこととする。

*琉球大学教育学部国語教育教室

二

『教育科學』誌は，東京都板橋区内の出版社同學社に創設された教育科學研究会（代表島内淳）から，1947（昭和22）年7月1日に創刊された。創刊の事情を，創刊号の「編集後記」は次のように述べている。

「出版の困難なこの時代にも教育雑誌は簇出し，教育界は漸くその本然の姿である教育文化樹立の方向にむいてきたことは欣ばしい。教育文化の問題はしかし戦前のそれの姿のままの再現であつてはならない。敗戦といふ貴い犠牲が省みられずに似たりよつたりの凡俗雑誌の刊行は用紙逼迫の折柄厳に慎まなくてはならない。そのことを充分に考へた上になほ，『それでも教育科學は打樹てられねばならない。日本に教育科學者を送り出し生み出させねばならぬ』とのやまれない意欲が幾多の障害を越えて本誌の創刊に至らせたのである。」

戦後まもなく多くの教育雑誌が創刊されたが，教育科学の建設という点では物足りないと考えられ，戦後の新教育は科学的なものでなければならないという強い願いからこの雑誌が創刊されたということがうかがえよう。

雑誌の体裁を見てみると，誌型は，A5版。頁数は，創刊号と第2号が，48頁。第3号は32頁。第4号から第19号まで48頁。第20号から第24号まで56頁。第25号は62頁。第26号は，60頁。第27号と第28号と第29号は，64頁。第30号は，80頁となっている。当初，用紙不足のため，第3号までは32頁と制限されていたが，創刊号と第2号は48頁で印刷が進んでいたので32頁は第3号だけでよかったと，第3号の「編集後記」に記されている。それ以後しばらく48頁で推移するが，用紙の入手難が改善するにしたがって，頁数が増し，分量の面からは充実していったことがうかがえる。

価格の面でみると，創刊号が10円。第2号から第8号まで15円。第9号と第10号が，18円。第11号から第13号まで20円。第14号から第16号まで25円。第17号から第19号まで30円。第20号と第21号が，35円。第22号から第24号まで40円。第25号と第26号が，45円。第27号から第29号まで50円。第30号が，55円。目まぐるしく価格が改定されており，しかも増頁に必ずしも対応していないということがうかがえる。創刊号以来度々奥付に印刷部数に制限があると記されているが，この部数の制限と目まぐるしい価格の改定は，読者の獲得という点から言えば，かなり厳しい事態であったと思われる。しかし，そういう困難を抱えながら，内容を充実させるために8月号と合併になった第14号（1948年9月1日発行）や，3月号と合併となった第20号（1949年4月1日号），及び台風で印刷所が水害をうけ創業不能になって1949年9月1日発刊の号が発行できなくなり翌月号と合併を余儀なくされた第25号と，1950年2月1日号を3月1日号に合併した号（第29号）を除けば，第30号まで毎月一日付けで定期的に発行されてきたのである。不定期発行や誌型の縮小という形での発行があたりまえのような戦後初期の出版状況のなかで，誌型を守り基本的に定期発行を継続したことは並大抵の努力ではなかったであろう。こうした点からも，教育科学の建設に対する意欲の程がうかがえるのである。

ところで，1950年4月1日に発行された第30号を最終号としたのは，同号の「編集後記」のなかに，次のような「休刊の挨拶」が掲載されているからである。

「本紙も漸く第三十號を数え，教育科學の建設に微力を捧げて参りましたが，今回都合により暫く休刊いたします。而して十分に想を整え案を練り復刊の機を得たいと考えています。読者諸彦のこれ迄の御高配を深謝し御諒承をお願い申上げます。（編集同人，発行者）」

上記のことからもうかがえるように，第30号を発行した後で休刊し，一区切りついていること。そして以下の号は休刊のまま発行されていない可能性があるということ。さらに，現在のところ復刊されたという事実が確認できないということ。これらの事実から『教育科學』誌は第30号で終刊したと考えられるのである。そこで，第30号で終刊したと見做したのである。復

刊号が何らかの形で確認されない限り，同誌は30号で終刊したとみてよいのではないだろうか。

次に，この雑誌の特徴であるが，後掲の目次からも分かるように毎号特集形式で編集され，かなりきちんと準備された論文や実践記録が掲載されているという点にそれが見られるように思われる。このことは，次のような編集方針を反映しているからであろう。

「本誌は抽象的な理論や低級な實践記録を排し，偶然的な所論や意見の羅列をさけ，われわれの努力のいとなみをさながら誌上に再現しようとつとめる。しかも各號とも適当な問題を中心に特輯し，號を追つて一貫した科学としての新教育の體系たらしめようとしてゐる。したがつて本誌はその都度よみ捨てられる性質のものではなく，集大成して教育科學者の行路をしめす道標たらしめたいとおもう。」（「創刊のことば」『教育科學』一九四七年七月創刊号）

このような『教育科學』誌のいき方に対しては，固いとか気軽に読めないという評価もあったようである。しかし，第14号の「編集後記」で「ある真摯な研究家が本誌を常に机邊に備え，表紙のクタクタになる程，いつも参考にして下さつているのを眼のあたり見て感激したことがある」と紹介されているような事実もあり，この雑誌の存在価値が，読者に一定程度認められ受け入れられたことがうかがえる。

以上，簡単に『教育科學』誌について紹介してきた。次に，その目次を紹介しよう。なお，原則として，漢字は当用漢字に改めた。

教育科学研究会編集『教育科學』総目録

第一号（一九四七年七月一日）
創刊のことば
教育の科学的研究　城戸幡太郎
教育における能率と管理　吉田　昇
児童観察の課題　依田　新
表紙絵について
新しい考査法の背景　沢田　慶輔
同学社出版だより
共同社会学校論　二関　隆美
児童の言語生活と調査
――新入学児童を中心に――　篠崎徳太郎
教育時感　橘　謙
児童生活圏の調査（第一報）
東京都新宿区淀橋第四小学校
家庭における話題の調査　教育科学研究室
個性調査票の問題　教育科学研究室
編集後記

第二号（一九四七年八月一日）
＜特集・教科課程＞
教科課程論　大塚三七雄
児童の生活と教科課程　青木誠四郎
同学社出版だより
社会的必要と教科課程　大島　三男
教科課程構成の諸問題　馬場　四郎
教育時感　橘　謙
カリキュラムの参考文献　岡津　守彦
児童生活調査（第一報）
東京都新宿区立落合第一小学校
新入学童の家庭生活の実態
――家庭通信を通じて――　佐藤　茂雄
社会科課題表の問題　教育科学研究室
編集後記

第三号（一九四七年九月一日）
＜特集・単元＞
単元の基本的考察　平松　秋夫
作業単元について　小見山栄一
単元の選び方　染田屋謙相
同学社出版だより
単元学習と基本教科学習　室田　昂
単元論の紹介　教育科学研究室
教育時感　橘　謙
単元学習の実際　佐藤　茂雄
編集後記

第四号（一九四七年十月一日）
＜特集・社会科＞
社会科の構成　上田　薫

社会科への批判　小沢　栄一
日本に於ける生活教育　結城　陸郎
座談会＝社会科指導をめぐって
資料解説　アメリカにおける社会科の発展
教育科学研究室
教育時感　橘　謙
中学社会科学習指導記録の書き方
コムュニティ・スクールの歴史的展開
築島　堯
社会調査について　石橋　義弘
社会科・自由研究を中心とした教育研究協議会（案内）
実践記録　本校社会科への歩み
東京都第三瑞光小学校　小西英
日本教育学会創設さる
編集後記

第五号（一九四七年十一月一日）
＜特集・学習指導法＞
学習指導法の展開　大塚三七男
学習理論と学習指導の原理　沢田　慶輔
小学校の算数教育計画に於ける最近の傾向
ヘレン・ヘッファナン
「学習指導要領」と学習指導法　海後　勝雄
優れた学習指導法　室田　昂
教育時感　橘　謙
学習指導法の諸問題　教育科学研究室
アクティヴィティ・学習指導と「場」・教師と
方法・分団学習・学習指導と教具及び施設
国語科学習手引の考察　山田　四郎
児童生活圏の調査（第二報）　淀橋第四小学校
編集後記

第六号（一九四七年十二月一日）
＜特集・問題法と構案法＞
デューイに於ける反省的思考　大島　三男
構案法の理論的考察　平松　秋夫
構案法・問題法に於ける学習段階　大槻　健
問題法の理論とその技術化
＝＝特に問題把握の指導に就いて＝＝
相原　勇
教育時感　小川　清
問題法と構案法の関係・学習指導
法の諸類型　教育科学研究室
実践記録
プロジェクトメソッドによる
郷土研究　都丸　修
平凡な試み（実践の記録）　馬場　正男
編集後記

第七号（一九四八年一月一日）
＜特集・評価と測定＞
測定と評価の原理　正木　正
生活指導と評価　平松　秋夫
精神検査と指導　小見山栄一
教育統計法　松原　元一
教育時感　小川　清
座談会　評価の諸問題
解説　考査の方法・成績通告　教育科学研究室
編集後記

第八号（一九四八年二月一日）
＜特集・小学校と中学校＞
小学校と中学校――その目標と課題――
小沢　栄一
松原　元一
六・三制の史的展開　仲　新
中学生の指導　牛島　義友
「科目」から「経験」への教科課程
大島　三男
男女共学への一反省　相原　勇
中等教育の参考文献　二関　隆美
教育時感　小沢　謙一
中学校に於ける課外活動の実践　河原田敏江
新制中学校の職業科　牛山　栄治
学習指導と学級編制　相沢　脩一
学級心理の一考察　大井　安美
同学社出版だより
編集後記

第九号（一九四八年三月一日）
＜特集・学校経営＞

学校経営と進歩的政治勢力　宗像　誠也
学校長の地位と職能　大島　三男
校地の選定と校舎の配置　菅野　誠
教育時感　小沢　謙一
我が校の学校経営　淀橋第四小学校
新制中学校経営についての覚書　新納　嘉夫
学級経営指標　室田　昂
社会科の進歩的性格について　馬場　四郎
高知県に於ける新制中学校の実情　橋詰　延壽
基礎学科の学力調査の一考察　小西　英
書評
　岡本重雄著「青年の内面生活」を読む
　依田　新
　馬場四郎著「社会科の本質」，井坂行男著「新しい小学校教師」，上田薫著「社会科とその出発」
編集後記

第十号（一九四八年四月一日）
＜特集・単元指導＞
学習指導の基底と単元の問題　石山　脩平
単元の設定　小沢　謙一
単元の展開　平松　秋夫
単元学習に於ける評価　二関　隆美
学習指導案とその基本的諸問題　室田　昂
教育時感　小川　清
能率的な図画工作教育
——特に社会科との関連に於けるものとその指導案——　川村　浩章
五年社会科の学習指導計画
——新潟第一師範学校男子部付属小学校——　宮下　美弘
アメリカに於ける単元指導例　教育科学研究室
同学社出版だより
編集後記

第十一号（一九四八年五月一日）
＜特集・生活指導＞
生活指導の本義　平松　秋夫
指導の組織について　小山田勝治
生活指導と学籍簿　沢田　慶輔
硬教育と軟教育　大塚三七雄
学校自治の指導　佐藤　瑞彦
米国行動哲学と新教育大講座（案内）
学童にたいする保健指導　宮本　忍
教育時感　小沢　謙一
学習能力研究の構造　中野　俊夫
生活指導とその実際
——学級生活指導を中心として——　永島　浩一
青少年の不良化防止　前田　憲司
生活指導の参考文献　教育科学研究室
編集後記

第十二号（一九四八年六月一日）
＜特集・学習指導要領と教科書＞
学習指導要領と教科書　林　伝次
学習指導要領の性格　本宮　乾峰
教科書問題是非　佐藤　瑞彦
児童図書と読書指導　関野　嘉雄
座談会・算数科学習指導要領と実際指導
理科教育に関する二三の反省　相原　勇
農村に於ける国語科学習指導の一ケ年
藤間欣二郎
家庭科の実際指導　竹中　久子
『教育科学』第一号——第十二号総目次
編集部
編集後記
同学社出版だより

第十三号（一九四八年七月一日）
＜特集・教育社会学＞
教育社会学の課題
——人間形成と社会形成——　平沢　薫
教育の社会学的研究と社会調査　馬場　四郎
フランス社会学とアメリカ社会学の背景と傾向について　清水　義弘
教育社会学の性格と方法　二関　隆美
教育時感　小沢　謙一
船木村に於ける社会実態調査　大田　堯
編集後記
同学社出版だより

第十四号（一九四八年九月一日，八月号との合併号）

＜特集・学習心理＞
活動性原理の教育心理的構造　正木　正
デュウイにおける教育的興味と努力について　大塚三七雄
学習の条件　中野　佐三
練習法の問題……シンポジウム……
まえがき　編集部
新教育と練習の問題　沢田　慶輔
算数科・数学科学習に於ける練習　松原　元一
社会科の練習　木暮　強
国語学習と練習　大井　安美
図画工作に於ける練習法　川村　浩章
学習指導と疲労　室田　昂
編集後記
同学社出版だより

第十五号（一九四九年十月一日）

＜特集・教科課程構成＞
教科課程の構成　大島　三男
単元設定の方法　岡津　守彦
書評
児童の要求の分析　阪本　一郎
社会の要求について　田中　正吾
教育時感　関　基也
新教科課程構成上の問題　室田　昂
教科課程構成への第一歩　神奈川師範男子部付属小学校
書評
編集後記
出版だより

第十六号（一九四八年十一月一日）

＜特集・共同学習＞
共同学習論　瀬川　三郎
特別教科活動と共同学習　平松　秋夫
共同学習実践計画への配慮　金児　賢治
共同学習の施設経営　飯塚　英雄
教育時感　馬場　四郎
共同学習における男女の問題　相原　勇
社会科の共同学習　大槻　健
低学年共同学習の実際　池田　芳雄
児童演劇ノート
――共同学習に関連して――　久保　清志
編集後記
出版だより

第十七号（一九四八年十二月一日）

＜特集・精神衛生＞
新教育と精神衛生の問題　正木　正
症候の形成とその処置　懸田　克躬
学校における精神衛生上の諸問題　平松　秋夫
家庭における精神衛生　三木　安正
生育史研究の方法　大島　三男
浮浪児の実態とその救済　堀　文次
少年の問題行為の早期発見　近藤　修博
編集後記
同学社出版だより

第十八号（一九四九年一月一日）

＜特集・教育制度＞
教育行政の本質と現下の問題　五十嵐　顕
教育専門職員の地位と権能
――教育長と指導主事について――　大島　三男
アメリカにおける教育委員会制度の発達　上田　亨
教育委員会と教師の立場　高田なほ子
社会計画と教育計画　二関　隆美
座談会・教育委員会とＰ・Ｔ・Ａ
編集後記
出版だより

第十九号（一九四九年二月一日）

＜特集・科学教育＞
わが国科学教育の特殊性　黒田　孝郎
現代における理科教育の問題　梅根　悟
科学教育随想　永田　武
新しい科学教育の指導　加藤　嘉男
さびの研究――鉄の赤さび――　持田　胖

持田くんの「さびの研究」について　相原　勇
家庭から　持田　信男
理科教育の反省　岡　義雄
教育時感　翠　園　生
理科指導の一形式　相原　勇
科学教育の設備　教育科学研究室
編集後記

第二十号（一九四九年四月一日，三月号との合併号）
＜特集・学校計画＞
学校計画論　二関　隆美
中学校における職員組織について　水谷　統夫
学級編制の問題　三好　稔
教育における調査・記録・報告　増田　幸一
入学期の特別指導　平松　秋夫
新制高校のガイダンス計画
――都立一高の場合――　佐藤　正憲
児童自治計画の確立　染田屋謙相
学校経営の再出発
東京都練馬区立開進第三小学校
新設中学校教育計画の諸問題　落合第二中学校
長　最上賢二
カリキュラム編成の組織
群馬県邑楽郡赤羽村小学校
編集後記
出版だより

第二十一号（一九四九年五月一日）
＜特集・学級経営＞
学級経営の根本問題　坂元彦太郎
学級経営とガイダンス　大塚三七雄
中学校の自由活動　北岡　健二
生活カリキュラム研究協議会案内
教育時感　小川　清
ホーム・ルームの運営　岡村　忠雄
生徒手帳「私の生活」
――評価と記録の一考察――　大井　安美
新入生の一日　久礼　美恵
農村中学校の学級経営　小野田勝一
低学年の学級経営　加藤　康順
教育と人間理解　北村　晴朗
新入児童の指導　池田　芳雄
編集後記
営業所移転通知

第二十二号（一九四九年六月一日）
＜特集・カリキュラムの展開＞
教育目標とカリキュラム　小沢　栄一
生活カリキュラム実施上の諸問題　室田　昂
単元の展開とその基礎的諸問題　中島　彦吉
中学校におけるコア・カリキュラムと国語学習指導　勝又　昌義
生活カリキュラムにおける図画工作
川村　浩章
生活カリキュラムにおける算数科学習
金児　賢治
社会の実態調査と標本抽出法　松原　元一
家庭科学習能力テスト　津田　幸子
編集後記
出版だより

第二十三号（一九四九年七月一日）
＜特集・ガイダンス＞
ガイダンス序説――意義と歴史――平松　秋夫
ガイダンスの技術　大塚三七雄
児童についての四つの問
――ガイダンスの記録について――井坂　行男
教育時感　泉野　緑
ガイダンスにおけるテスト　友田不二男
不良化防止とガイダンス　高木　太郎
翳を持つ子供
――性格指導の一事例――　都丸　修
ガイダンスの実際運営
茨城県筑波郡三島中学校
書評　大塚三七雄
アーチキュレーションの問題
――教育に於ける――　高橋　省己
編集後記
出版だより

第二十四号（一九四九年八月一日）
＜特集・教職員の問題＞
教職論　玖村　敏雄
教職の分析
——教職研究の問題論的・方法論的構図——　村田　忠三
教員の法的地位　安達　健二
教員養成大学の問題　岩下　富蔵
教職と児童理解　阪本　一郎
教育文化活動と教員組合　樋笠　達雄
助言指導論　平沢　薫
今後の教師現職教育　扇谷　尚
ガイダンス組織の実際　愛知一師男子部付小　鈴村　国市
編集後記
出版だより

第二十五号（一九四九年十月一日，九月号との合併号）
＜特集・用具教科＞
用具教科の成立とその性格　海後　宗臣
生活カリキュラムと用具教材　松原　元一
用具教材をどう取扱うか　木暮　強
用具としての言語学習　大井　安美
用具教科としての算数　金児　賢治
教育時感　安藤たつを
児童たちに話す勇気をもたせよう
——話し方の指導について——　釘本　久春
社会科におけるスキルの問題　吉野　正男
誤りやすい九九　有田　健一
本校におけるガイダンス　山形師範女子部付属小学校
北海道遊記　松原　元一
トラックスラー著「ガイダンスの技術」刊行に寄す
　カリキュラムからガイダンスへ　城戸幡太郎
　望ましいチャンスを期待する　清水幾太郎
　おすすめすることば　正木　正
　貴重な研究資料　木下　一雄
　本書刊行の意味するもの　依田　新
　思想から現実的技術へ　海後　宗臣
　ガイダンスを基礎づける　青木誠四郎
　学ぶべき高度の科学性　馬場　四郎
　訳者に感謝　小沢　謙一
編集後記
出版だより

第二十六号（一九四九年十一月一日）
＜特集・健康教育＞
健康教育の諸問題　竹之下休蔵
健康教育と健康指導　平松　秋夫
学校におけるスポーツ　笠井　恵雄
わが校における健康指導　東京学芸大学大泉分校付属中学校
身体検査の意義と方法　村上　貞次
生活カリキュラムと体育　川口　哲弥
健康カードについて　横井　真雄
小学校における体育指導の実際　本多　武男
ガイダンスの運営　宮崎師範付属中学校　成合　尚義
徒弟法はどうなつているか？　ポールバージェヴィン
編集後記
出版だより

第二十七号（一九四九年十二月一日）
＜特集・教育技術＞
教育技術化の課題　大塚三七雄
社会科学習活動の技術化　清水　義弘
技術としての講義法　室田　昂
学習と視聴覚的補助　菊地　光秋
美術教育の技術　山形　寛
児童観察の技術化　中島　彦吉
音楽の教育　有賀　正助
低学年における音楽　久礼　美恵
音楽能力表について　榊原　五郎
編集後記
出版だより

第二十八号（一九五〇年一月一日）
＜特集・現下教育の問題点＞
最近教育の問題　大塚三七雄

学力は低下したか　平良　恵路
吉田　司
座談会　アーチキュレーションの問題
その後の討議法　室田　昂
教育時感　翠園生
日本に於ける宗教教育について　早坂泰次郎
書評　大塚三七雄
教育的開拓者　O.C.カーミチェール
児童自治の課題　福富　稔
中学校ガイダンス実践　東京学芸大学大泉付属中学校
編集後記
出版だより

第二十九号（一九五〇年三月一日，二月号との合併号）
＜特集・評価と記録＞
単元学習の評価　東京学芸大学大泉付属中学校
生徒の観察と記録
――一生徒を中心とする評価の実際――
東京学芸大学大泉付属中学校
新刊紹介　大塚三七雄
児童評価の実践
――一児童を中心に――　中島　彦吉
児童と共に暮らして
――事例研究一例――　鹿児島大学付属中学校
中村　昇
編集後記
出版だより

第三十号（一九五〇年四月一日）
＜特集・生産教育と地域社会＞
生産教育の意義　城戸幡太郎
職業分析とカリキュラム　長谷川　淳
中学校職業・家庭科の性格　栩木　功
地域社会における生産教育　湯山　五策
職業教育に就て　I・ネルソン
教育現実の底にあるもの
――一地域社会の教育――　正木　正
教職と社会
――教職の職業社会学的考察――　二関　隆美
大都市の家庭
――教育社会学的考察――　浅田　宏
小学校における一単元評価の実際　池田　芳雄
長島　浩一
羽生　鶴壽
編集後記
休刊の挨拶
出版だより